

中国伝統医学における鍼灸文献の祖型について

王 財源

関西医療大学教授、東洋医学研究センター所長

中国の伝統医学の発芽期から形成期には、後世の医家により豊富な臨床実績が記録された竹簡や帛書が残存し、現代の臨床医学を補完する医療として受け継がれている。

とりわけ、歴代の主要鍼灸文献をみると、先秦兩漢時代、魏晉南北朝時代、隋唐、宋、金元時代、明代、清代、中華民国期に多くの古医籍が誕生したが、その祖型となる医書資料は、先秦、兩漢代期に淵源がある。

たとえば、先秦兩漢時期の鍼灸に関する出土資料をみると「睡虎地秦墓医簡」「馬王堆漢墓医学帛書」「張家山漢墓医簡」「天回漢墓医簡」「黄帝内经」「武威漢代医簡」「難経」「明堂孔穴針灸治要」など出土資料より、すでに成熟した医学体系が生まれ、魏晉南北朝時代では『針灸甲乙経』『肘後備急方』や、隋唐代では『黄帝内经明堂類成』『千金方』『外台秘要』等々の文献が煌星の如く現れ、多くの治療家教本として引き継がれた。それら教本の特筆すべき共通事項に、異なった時代背景の流れを凝視しつつ、注釈を組み入れながら、歴代の医書資料の発展を導いた。とくに“諸子百家、”という思想家たちの集団の出現により、数多の医書資料に影響を与えてきたことは史実により明らかである。“諸子百家、”が載る『漢書』藝文志みると儒家、道家、陰陽家、法家、名家、墨家等々の思想家を指し、とくに道家思想は医術や医籍の発展に足跡を刻むのである。

経脈と関係する祖型も例外ではなく、馬王堆漢墓からの医経文献には『足臂十一脉灸図』（帛甲）があり、足太陽脉、足少陽脉、足陽明脉、足少陰脉、足太陰脉六節と、臂編には臂太陰脉、臂少陰、臂太陽、臂少陽脉、臂陽明脉の五節からなり、複数の循行経路図に分け、そこにそれと関連する病証をまとめた治療法が載る。また、『陰陽十一脉灸図』（甲本）では陰脉と陽脉より成りたち、陽編は足巨(太)陽脉、足少陽脉、足陽明脉、肩脉、耳脉、齒脉があり、陰編には足巨(太)陰脉、足少陰脉、足厥陰脉、臂巨陰脉、臂少陰脉の十一脉をそれぞれ区分して、該当する病証(是動病と所生病)に対する治療法がみえる。「気」の虚実からみる診察法としては出土した『脉法』（甲本）には経脈中の「気」の流れに注目し、砭石や灸を用いる際に、“脉”による診察が疾病の治癒と深く結びつくことが論述されているのである（馬王堆では経脈の文字はなく“脉”の文字ですべて示されている）。おどろくことに2013年に、中国の四川省成都市、金牛区天回鎮土門社區の東側から、前漢代の墓から医学資料が発掘された。これが通称、老官山と言われている遺跡である。発掘された墓は4つあり、その中の1つから医学に関係する竹簡が736支確認されている。さらに漆の経穴人形が発掘され、そこには赤や白、黄色で描かれた線状のものが確認され、左右対称で縦方向に描かれていることより、初期の経絡人形である可能性が高い。そこでこれら発掘された経脈人形を基軸に前漢の医学を検討し、日本国内で発見された経絡人形との関係性について今回は考察したい。